



緊急生産調整推進対策の計画的な推進を図ろう。
直播栽培等新技術の導入と地域性を活かした米づくりを進めよう！

平成11年度

稻作情報

会津版

第4号

平成11年 7月7日

「ふくしま新世紀農業・農村確立運動」県推進本部

発行：福島の米稲作情報編集会議
編集：福島県農業試験場会津支場

基本技術を励行し、安定多収・良質良食味の会津産米の更なる向上を図ろう 1カ月予報（7月2日仙台管区気象台発表）

7月10日～7月16日：太平洋側を中心に平年同様、曇りや雨の日が多いでしょう。平均気温は低い見込み。

7月17日～7月30日：平年同様、晴れの日が多くなるでしょう。平均気温は平年並みの見込み。

移植栽培の当面する技術対策のポイント

栄養管理といもち病防除の徹底を！！

1 生育状況

- (1) 試験場内の生育：草丈が平坦部は平年並～やや短い。高冷地は平年並～やや長い。茎数は平坦部のコシヒカリは少ないが他は平年並み。高冷地は各品種とも平年より多い（表1）。主稈出葉からみた生育は平坦部が平年並～3日遅く、高冷地はまいひめ以外は1～3日進んでいる。
現在の生育から予想される幼穂形成始期及び減数分裂期は、ほぼ平年並になると思われる（表3）。
- (2) 土壌中のアンモニア態窒素は、6月下旬～7月上旬にかけて急激に低下している（表2）。
- (3) 現地の生育：草丈は平年並み。ほ場間差は見られるが必要茎数は確保された。葉色はさめ始めている。

2 当面の技術対策

- (1) 水 管 理 中干しは幼穂形成期までには終了し、以降は間断かんがいとし、根の健全化と作土の固 化維持を図る。幼穂形成期、減数分裂期に17℃以下の気温が予想される場合は、深水管 理により幼穂を保護する。
- (2) 追 肥 つなぎ肥は、葉色が極端に低下した場合を除き控える。施用量はムラ直し程度とする。 穂肥は、生育量、葉色により診断し慎重に行う。基準より生育量が大きかったり葉色が 濃い場合は、時期を遅らせたり、減量する（表5）。
- (3) いもち病 会津地方の本田移植株での葉いもち確認日は平年より9日早い。置苗からの感染である。 防除 会津地方の7月以降の感染好適日の出現日数は他地方より少ない。
葉いもちの早期発見に努め、発生を確認したら直ちに液剤か粉剤による防除を実施する。 育苗箱施薬や粒剤による葉いもち予防を行ったほ場でも、発生が認められた場合は、散 布剤による防除を行う。上位葉の葉いもちは、穂いもちに直結するため防除を徹底する。 穂いもち防除を粒剤で行う場合は、出穂10～20日前までに湛水状態で施用する。

直播栽培の当面する技術対策のポイント

倒伏させない管理と除草剤耐性？雑草の防除を！！

1 生育状況

- (1) 会津支場内5月10日播きの生育：草丈は平年より短く、茎数も少ない。葉数はほぼ平年並。（表4）。
- (2) 現地の生育：苗立ちが悪かったほ場以外は生育良好である。生育過剰田も散見される。

2 当面の技術対策

- (1) 水管理 倒伏防止と過剰生育を防ぐため、幼穂形成期まで中干しを継続する。
- (2) 肥培管理 ほ場間の差が大きい。窒素の追肥は、幼穂形成期の生育量を確認し、必要な場合は穂肥の 時期に行う。施用量は移植栽培よりも控え目とし、稈の伸長を防ぐ。
- (3) 雜草防除 アゼナ、ホタルイ、アメリカセンダングサ、クサネム等が見られる場合はMCP剤やベン タゾン剤で防除する。MCPを含む剤は幼穂形成期以前に使用する。特に、アゼナ、ホタルイが残草したほ場は、SU剤耐性の恐れがあるため徹底防除する。
- (4) いもち 防除 移植栽培と同様に、ほ場をよく見回り、早期発見、早期防除に努める。

具体的なデータ

表1 7月5日の生育状況(作況試験・中苗・5月20日植)

会津支場(平坦部)								冷試(高冷地)							
品種	年次	草丈(cm)	茎数(本/m ²)	葉数(枚)	葉色(SPAD)	品種	年次	草丈(cm)	茎数(本/m ²)	葉数(枚)	葉色(SPAD)				
ひとめ	本年	57.9	844	10.2	42.4	まい	本年	46.9	760	8.9	39.8				
ぼれ	前年	53.1	825	10.1	42.9	ひめ	前年	44.1	639	8.8	42.6				
	平年	57.8	844	10.2	44.0		平年	46.6	640	9.0	43.2				
平年比・差		100	100	0.0	-1.6	平年比・差		101	119	-0.1	-3.4				
コシヒ	本年	56.2	636	9.8	40.2	初星	本年	46.1	795	9.6	41.6				
カリ	前年	53.6	672	10.1	40.1		前年	47.3	857	9.2	44.7				
	平年	58.4	813	10.2	41.2		平年	46.0	718	9.2	44.6				
平年比・差		96	78	-0.4	-1.0	平年比・差		100	111	+0.4	-3.0				

表2 土壤中のNH₄-N

場所	年次	NH ₄ -N(mg/乾土100g)	
		6月下旬	7月上旬
会津	本年	4.34	0.88
支場	前年	3.90	1.57
	平年	4.79	1.42
冷試	本年	5.79	1.82
	前年	7.97	1.49
	平年	5.13	1.68

注: 地力試験三要素区

表3 幼穂形成始期と減数分裂期の予想

品種	幼穂形成始期		減数分裂期
	本年	平年	
会津	初星(7.10)	7.9	(7.17~7.22)
ひとめぼれ	(7.13)	7.12	(7.21~7.26)
支場	ササニシキ(7.13)	7.12	(7.22~7.27)
冷	コシヒカリ(7.)	7.19	(7. ~8.)
試	まいひめ(7.11)	7.10	(7.24~7.29)
	初星(7.14)	7.15	(7.27~8.1)

注: 作況試験・中苗・5月20日植

表4 湿水直播生育状況(播種後60日)

試験場所	年次	播種日(月・日)	苗立ち数(本/m ²)	草丈(㎝) 茎数(本/m ²) 葉数(葉)		
				会津	支場	平年
会津	平11	5.10	62	43.8	661	9.6
支場	平10	5.8	127	60.5	889	9.6
	平9	5.9	135	59.6	920	9.3
	平年	5.9	128	57.8	836	9.4
	平年比	+1	48	76	79	0.2

注: 品種 ひとめぼれ

表5 生育診断と穗肥の目安

	草丈(㎝)	幼穂形成期			出穂前日数(日)	窒素成分量(kg/10a)
		葉 カラースケール	色 SPAD502	ヨード 加(%)		
平 ひとめぼれ	65~70	3.5~4.0	37~41		-24~-20	2.0
		4.0以上	42以上		-15	1.5~2.0
担 ササニシキ	65以下	3.0~3.5	33~37	55以上	-15	1.5~2.0
		3.5以上	38以上		-15~-10	1.0~1.5
地 コシヒカリ	65~70	3.0~3.5	34~39	55以上	-15	1.5~2.0
		3.5以上	40以上		-15~-10	1.0
山 まいひめ	55以下	4.0未満	42未満		-24~-20	2.0
		4.0以上	42以上		-15	2.0
地 初 星	55以下	4.0未満	40未満		-24~-20	2.0
		4.0以上	40以上		-15	2.0

大豆・ソバ栽培の技術対策のポイント

(1) 大豆

追肥培土 5~6葉期に達したので、2回目の中耕培土を早急に行う(第1本葉節が隠れる程度)。

中耕培土時に、コーティング尿素(LPコート70)を窒素成分で6kg/10a施用する。

害虫防除 病害を媒介するアブラムシ類や、高温年に多発するハダニ類を中心に防除を防除する。

(2) ソバ

排水対策 ソバは湿害に極めて弱い。特に、転換畠ではほ場の団地化と明渠設置が有効である。

種子準備 種子は良く選別し、充実した種子を用いる。10a当りの播種量は、条播で3~5kg、散播は6~8kgである。

播種時期 播種適期は平坦部が7月下旬~8月上旬。山間部は7月中旬~下旬である。また、播種期~成熟期の日数は品種により60日~80日程度の幅があるため利用品種により播種期を調整する。